

わたしのW杯

ここにきて、外ではほとんど韓国語を使わなかった。

山梨大大学院で日本近代文学を研究する安仁淑さん(33)。約十年前、夫とともに来日した。それからずっと「来たからには、すべてこのやり方で暮らす」。そう心掛けてきた。自分たちはもう、新しい世代だ。今は自分を「こ」に合わせ、しっかり学ぶことが大切。でも、その時はそれだけでは割り切れない何かが、まだ自分を包んでいた。

韓国語に強い関心

子どものころから、祖父母や学校で聞かされてきた母国の歴史。近くて遠い国といわれ続けてきた日韓。安さんはそれから何年かは、自分でもそれを否定しきれないまま生活を続けた。

生まれた子どもが大きくなり、買い物中のスーパーで「オムマル(お母さん)」と呼び止められたとき。「回りの人が一斉

近づいた 遠い隣国

に視線を浴びてきた。一瞬、戸惑った。もし私たちがアメ

大切なのは過去より未来



には「Kポップ」と呼ばれる韓人な人が集まるのだろうか」。関心を寄せてくれることが、素直にうれしかった。

一過性の不安も

依頼を受け、この四月からは甲府市内の外国語学校の韓国語講師に就いた。始まる前は「そ

に終わらないかと、一抹の不安もある。「それは思い過ごしであってほしい。日韓共催を契機に、パートナーとして歩んでいきたい」

でも、その応援の仕方がきつと、以前

る必要もないと思っている。本とは違うと安さんは言う。「日当に大切なのは過去より未来」。本人にも韓国人にも、今は互いに自国の次に頑張ってほしい、そう心から思っている人が多いから」

韓国国内でも日本ブームが起きている。互いの理解をW杯が加速させているのは間違いない。

ただ、反動でW杯後の両国を以前よりも冷めさせほしくないか、この盛り上がりが一過性のものか、この春からスタートした韓国語教室で教壇に立つ安仁淑さん

この春からスタートした韓国語教室で教壇に立つ安仁淑さん

秀樹、高橋淳が担当します

「未永いパートナー」願う

母国の文化に日本人が目を向け始め、ちょっとした韓国ブームの到来。この山梨でも甲府市の中心街を歩くと、アーケード